

附 錄



志賀先生遺影

1 大甲公學校教職員

	M32	M33	M34	M35	M36	M37	M38	M39	M40	M41	M42	M43	M44
金子政吉	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長
汪清水	訓導	訓導	訓導		訓導	訓導	訓導	訓導	訓導	訓導			
志賀哲太郎	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇
陳蕙芬	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇				
橋張常次郎			教諭	教諭	教諭								
陳備				雇	雇								
氏家匡介					公医	公医							
本多友長					公医	公医							
木村武次郎					公医								
齋藤連水						公医							
鄭聯揖						訓導	訓導	訓導					
莊龍						雇	雇	雇		雇	雇	雇	
久本平三郎								教諭	教諭				
池羽六三郎									教諭	教諭	教諭	教諭	
莊祿生									訓導	訓導			
林有信									訓導	訓導			
許如杏									訓導	訓導			
吳海涼										雇	雇	雇	雇
洪氏敬										囑託	囑託	囑託	囑託
陳嘉瑞											訓導	訓導	訓導
黃並傳											雇	雇	雇
葉國											雇	雇	雇
許天奎												訓導	訓導
升田良造												公医	
上野齋													公医
鈴木寬													教諭
黃清波													雇
郭彩鳳													
金城盛保													
杜瑞抱													
陳炳													
何氏唾春													
岡村正巳													
手塚廣重													
平田虎男													
劉作貞													
川島一二													
李欽水													
陳嘉邦													
杜聯朝													
何氏秀珍													
黃清本													
雷田豐													
郭金焜													
李水彰													
黃雀													
堀之内恒二													
陳長清													
連朝													
北原守一													
北原イワ													
杜允順													
連曾氏紅桃													
田中武雄													
番山修三													
劉朝棟													
高瀨谷マサ													
番山タキ													
小野一郎													
吳煥烈													
林芳慶													
小美信子													
愛甲重吉													
千綿清													
李慶珍													
瀨氏雲													
瀨政忠雄													
郭朝輝													
淺野すゑ													
陳慶隆													
北島乙五郎													
林氏湘雲													
黃送來													
教員數	4	4	5	5	9	9	6	7	9	9	9	11	10

※訓心は訓導心得、諭心は教諭心得、員心は教員心得、準訓は準訓導 (臺灣總督府職員錄大甲公學校引用)

M45	T2	T3	T4	T5	T6	T7	T8	T9	T10	T11	T12	T13	
校長	校長												金子政吉
													汪清水
雇	雇	雇	雇	雇	雇	雇	諭心	諭心	諭心	員心	員心	員心	志賀哲太郎
													陳藻芬
													橋張常次郎
													陳備
													氏家匡介
													本多友長
													木村武次郎
													齋藤連水
													鄭聰揚
													莊龍
													久本平三郎
													池羽六三郎
													莊禪生
													林有信
													許如杏
													吳海涼
囑託													洪氏敬
訓導	訓導	訓導	訓導	訓導	訓導		訓導	教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	陳嘉瑞
	雇	雇	雇	雇	雇	雇	訓心	訓心	訓心	員心	員心	準訓	黃並傳
													葉國
訓導													許天奎
													升田良造
													上野齋
教諭	教諭												鈴木寬
雇													黃清波
訓導	訓導	訓導	訓導	訓導	訓導								郭彩鳳
雇													金城盛保
	訓導	訓導	訓導	訓導	訓導	訓導	訓導	教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	杜瑞抱
	雇	雇											陳炳
													何氏唾春
		校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	校長	岡村正巳
		教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	教諭	手塚廣重
		雇	雇	教諭	教諭	教諭							平田虎男
		訓導											劉作貞
			教諭	教諭	教諭	教諭	教諭						川島一二
			雇	雇	雇								李欽水
			雇										陳嘉邦
				訓導	訓導	訓導		教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	杜聯朝
				雇									何氏秀珍
					訓導	訓導	訓導	教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	黃濟本
						教諭	教諭						富田豊
						訓導	訓導	教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	郭金焜
						訓導	訓導	教諭					李水彰
						雇	訓心		訓導				黃雀
						雇							堀之内恒二
						雇	訓心						陳長清
							訓心	訓心					連朝
							教諭						北原守一
							諭心						北原イワ
							訓心	訓心					杜允順
							訓心	訓心					連曾氏紅桃
								教諭	教諭				田中武雄
								教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	香山修三
								教諭	教諭	訓導	訓導		劉組棟
								教諭	教諭				高瀬谷マサ
								諭心	諭心				香山タキ
								教諭	教諭	訓導	訓導	訓導	小野一郎
								訓心	員心	準訓	準訓	準訓	吳墩烈
								訓心	員心	準訓	準訓		林芳鹿
								諭心					小美信子
									訓導	訓導	訓導		愛甲重吉
									訓導				千綿清
									準訓	準訓	準訓		李應珍
									員心	員心	員心		瀨氏雲
										訓導	訓導		瀧政忠雄
										訓導	訓導		郭組輝
										訓導			淺野すゑ
										員心			陳應隆
											訓導		北島乙五郎
											訓導		林氏湘雲
											訓導		黃送來
9	9	11	11	13	12	15	17	17	18	17	20	20	教員數

 <p>初代校長 金子政吉 M31～T 2 茨城県</p>	 <p>雇 志賀哲太郎 M32～T 13 熊本県</p>	 <p>雇 陳藻芬 M32～M40 本島人</p>	 <p>雇 莊 龍 M37～43 本島人</p>	 <p>訓導 陳嘉瑜 M42～S 3 M37卒 (第1回) 本島人</p>
 <p>訓導 林有信 M40～41 本島人</p>	 <p>雇 黃並傳 M42～T 14 M37卒 (第1回) 本島人</p>	 <p>訓導 許天奎 M43～45 M38卒 (第2回) 本島人民族運動</p>	 <p>雇 黃清波 M44～45 M40卒 (第4回) 本島人民族運動</p>	 <p>訓導 郭彩鳳 M45～T6 M40卒 本島人</p>
 <p>訓導 杜瑞抱 T2～S 7 M40卒 本島人</p>	 <p>訓導 陳焮 T2～3 M41卒 (第6回) 本島人民族運動</p>	 <p>二代校長 岡村正巳 T3～15 福岡県</p>	 <p>教諭 手塚廣重 T3～6 長野県</p>	 <p>教諭 平田虎男 T3～7 福岡県</p>
 <p>教諭 川島一二 T4～8 千葉県</p>	 <p>雇 陳嘉邦 T4～5 M38卒 本島人 民族運動</p>	 <p>雇 李欽水 T4～6 本島人 民族運動</p>	 <p>訓導 杜聰朝 T5～ M45卒 (第9回) 本島人</p>	 <p>訓導 黃清本 T6～ M42卒 (第7回) 本島人</p>

 <p>教諭(三代校長) 富田豊 T7~8 茨城県</p>	 <p>訓導 郭金焜 T7~ 本島人M45卒</p>	 <p>訓導 黄雀 T7~10 本島人M42卒</p>	 <p>訓導 李水彰 T7~9 本島人</p>	 <p>訓導心得 陳長清 T7~9 本島人M42卒</p>
 <p>雇 堀之内恒二 T7~8 宮崎県</p>	 <p>教諭心得 北原イワ T8 福岡県</p>	 <p>教諭 田中武雄 T7~10 広島県</p>	 <p>訓導 劉朝棟 T7~12 本島人T3卒</p>	 <p>訓導 香山修三 T9~ 熊本県</p>
 <p>教諭 高瀬谷マサ T9~10 長崎県</p>	 <p>教諭心得 香山タキ T9~10 熊本県</p>	 <p>訓導 小野一郎 T10~ 福岡県</p>	 <p>準訓導 呉墩烈 T10~ 本島人</p>	 <p>準訓導 林芳慶 T10~ 本島人</p>
 <p>教諭心得 小美信子 T10 鳥取県</p>	 <p>訓導 愛甲重吉 T11~ 長崎県</p>	 <p>訓導 千綿清 T11 本島人</p>	 <p>準訓導 李慶珍 T11~ 本島人</p>	 <p>準訓導 杜允順 T8~9 本島人</p>
 <p>教員心得 瀬氏笑 T11~ 本島人</p>	 <p>訓導 瀧政忠男 T12~ 愛媛県</p>	 <p>訓導 郭朝輝 T12~ 本島人</p>	 <p>訓導 黄送來 T13~ 本島人</p>	 <p>訓導 林氏湘雲 T13~ 本島人</p>



大正14年1～3月撮影（大甲國民小學提供） 哲太郎の死亡で黄雀教師が代替で配属される



昭和5年頃撮影（大甲國民小學提供）



頂店國語講習所昭和12年頃撮影（大甲國民小學提供） 同講習所は公学校へ通えない子を対象とした学校で、校長は大甲公学校校長が兼任した。

2 志賀哲太郎をめぐる人々

中村傳兵衛1807-1874

読み書きの手ほどきを受けた最初の恩師。文化4年生まれ、中村家十二代当主。庄後見人、副手代役などを努めた役人である。

志賀喬木 1831-1879

志賀塾の恩師。天保2年生まれ。筑後(福岡県)柳河藩士。木下鞆村(かそん)、塩谷愛宕陰(しおのや-とういん)に学ぶ。藩の評定所吟味役となり、明治2年藩校文武館、明治5年木山の志賀塾、明治7年小天の蒙正館、明治9年筑後三池の銀水義塾で漢学を教える。本姓は杉森。名は憲古(のりひさ)。通称は退蔵。別号巽軒(そんけん)。



中西牛郎 1859-1930

神水義塾の恩師。肥後国 号は蘇山。幼少より中村直方、平河駿太に漢学、木村弦雄に洋学を学ぶ。のち東京の勸学義塾で英語を修め、更に同志社に転学する。明治16(1883)年神水義塾を開き英語を教える傍ら済々黌でも教鞭をとる。政党が起こると「紫溟雑誌」、「紫溟新報」記者となり、また仏教を研究する。同21年米国へ遊学する。帰国後、西本願寺文学寮の教頭となり、その傍ら雑誌「経世博義」を刊行して国粹主義を鼓吹する。のち「大阪毎日新聞」「東京日日新聞」の記者となり、同32年清国政府官報局翻訳主任、同年天理教の教典の編集に従事し、台湾に渡って台湾総督府の囑託員として活躍する。



八淵蟠龍 1848-1926

神水義塾の恩師。御船の浄土真宗本願寺派東福寺。明治16(1883)年神水義塾で仏典を教え、各地を演説して廻る。同26年には、シカゴで開催された万国宗教会議に日本代表として参加する。



藤岡覚音 1823-1907

神水義塾の恩師。文政6年10月3日生まれ、浄土真宗本願寺派、家は代々肥後浄蓮寺の住職であるが、嘉永6年正覚寺の住職となる。明治16(1883)年神水義塾で宗教学の講師を務める。その後、自坊に宗学研究寮竜水学館を開く。



井上毅 1844-1895

明治法律学校時代の寄宿舎「有斐学校」の校長。官僚、政治家、熊本生まれ。明治4年(1871)司法省に出仕、同5年渡欧。同7年大久保利通の清国派遣に随行する。以降、岩倉具視・伊藤博文らの命で各種の重要政策を立案する。同14年欽定憲法構想立案や国会開設の勅諭を起草する。同19年有斐学校校長、同23年枢密院顧問官となり教育勅語を起草、同26年第2次伊藤博文内閣の文相に就任する。

高橋長秋 1858-1929

明治法律学校時代の寄宿舎「有斐学校」の校長。実業家、熊本出身。西南戦争では熊本隊に加わり、政府軍と戦う。明治12(1879)年同心学舎(現済々黌高)の創立に参加する。同20年有斐学校校長となり、その後、実業界に入り、台湾拓殖会社役員、大阪百三十銀行副頭取、肥後銀行頭取などを経て熊本電気を創立する。



岸本辰雄 1851-1912

明治法律学校入校時の校長。鳥取県出身。明治9(1876)年司法省初の留学生としてフランスに留学する。帰国後、大審院判事などを経て弁護士となる。この間、同14年に明治法律学校を創設し、同21年初代校長となり、同36年明治大学学長となる。



松平正直 1844-1915

新聞記者時代の熊本県知事。越前国(福井市)出身。戊辰戦争(1868~69)には会津征討越後口軍監として出兵。明治6(1873)年内務省創設に伴い内務少丞、同10年内務権大書記官、この間大久保利通内務卿の知遇を得、同11年宮城県権令、同19年同県知事、次いで同24年熊本県知事となる。同25年の第2回総選挙時には品川弥二郎内相の命で選挙干渉を行う。同31年第2次山県有朋内閣で内務次官に就任する。



古荘嘉門 1840－1915

記者時代の国権党総理。新屋敷生まれ、官僚、政治家、号は火海。明治11（1878）年大阪上等裁判所判事、のち郷里熊本へ帰り、同14年紫溟（しめい）会を組織し、民権論に対抗して国権主義を唱える。同23年熊本国権党総理となり、衆議院議員（当選5回）となる。台湾植民隊長、台南県・群馬県・三重県の各知事を務め、同38（1905）年貴族院勅撰議員となる。



佐々友房 1854－1906

記者時代の国権党副総理。内坪井生まれ、教育者、言論人、政治家、号は克堂。紫溟会を組織し、済々黷を創設する。天皇主権の国権論を主張し、のち熊本国権党副総理となる。また帝国党を結成し、頭山満らと対露同志会も結成する。



安達謙蔵 1864-1948

記者時代の先輩記者。政治家。熊本藩士の子。渡鮮して《朝鮮時報》などを興し、閔妃暗殺事件に連座する。のち熊本国権党の重鎮となり、明治35（1902）年以後代議士となる。立憲同志会に参加し、憲政会・民政党の幹部となって、加藤高明内閣の通信大臣、浜口・若槻内閣の内務大臣などを務める。哲太郎の教員採用にあたって紹介状を書く。



宗方小太郎 1864-1923

記者時代の国権党同志。熊本県出身。国権党员、諜報員、ジャーナリスト。佐々友房に従い、清国に渡る。荒尾精のもとで大陸事情を調査、日清戦争では海軍の偵察任務につく。のち東亜同文会の設立に参加する。大正3（1914）年上海で、東方通信社を興す。哲太郎とは記者時代、公学校時代に連絡を取り合っている。



宮崎滔天 1870-1922

記者時代の交友。革命家、荒尾生まれ、本名は虎蔵（寅蔵）。大江義塾、東京専門学校に学び、孫文と交わる。中国革命を積極的に援助し、惠州の挙兵計画にも参加する。明治38（1905）年東京における中国人留学生の革命組織中国革命同盟会の結成に尽力し、孫文の委嘱で日本全権委員となる。同44年辛亥革命が起こると、これに参加して孫文の南京政府樹立を助ける。



紫藤章 1860-1940

記者時代の国権党の同志。菊池郡原水村出身。紫藤寛治（のち衆議院議員）の次男として生まれ、農学博士、実業家。熊本バンドの一人であったが、のち国権党に移り、哲太郎に原水小学校教師を勧める。農商務省に入り生糸検査所々長を努める。



紫藤寛治 1832-1897

記者時代の熊本県衆議院議員。紫藤章の父。熊本県原水村で和漢学を修めた後、戊辰戦争に従軍する。明治7年原水小学校を開校する。同10年西南戦争に従軍し、同14年に大原義塾を開く。その後、熊本県議会議員、同23年から衆議院議員を4期務め、製糸業の発展に尽力する。



平井金三 1859～1916

記者時代の英学塾「京都オリエンタルホール」の恩師。日本の近代宗教史に重要な足跡を残した明治の英学者で、京都に英学塾を開く。反キリスト教論者オルコットを招聘し、仏教復興運動を最高潮にもたらし、明治26（1893）年にシカゴで開催された世界宗教会議では、不平等条約に関して雄弁をふるい満場の喝采を浴びる。

汪清水

大甲公学校赴任時の同僚教師。本島人。明治32（1899）年から同36年まで大甲公学校で教鞭をとる。哲太郎が音楽が不得手であったため、全学年の音楽を担当する。明治41年に同校を辞職し、その後、莊龍、許天奎、陳庸、郭彩鳳、陳藻芬、杜香國等と詩人組織「蘅社」を創立する。

島村ソデ 1866-1930

哲太郎を支えた女性。河内村出身。台湾へ渡り、伯公坑で哲太郎に女中として雇われ、土匪の襲撃で足が不自由となる。大甲では公学校の哲太郎の宿舎で寝起きしながら、哲太郎の身の回りの世話をし、教え子たちにも母のように接する。哲太郎の死亡後は、遺品を津森村の妹澤田ミノへ届け、再び大甲に戻って出家する。墓碑には「忠婢島村ソデ」とある。

家永泰吉郎 1868-1915

教員採用決定の役人。佐賀県東唐津の出身。大分県尋常中学教諭から明治28（1895）年に陸軍省雇員を命ぜられ台湾語の通訳官となり台湾へ渡る。同年7月台湾総督府雇員心得、同29年4月から台北支庁書記官、法院判官、苗栗弁務署長、苗栗庁長、新竹庁長などを歴任し、大正3（1914）年に退官する。



金子政吉 1870-1938

大甲公学校の初代校長。茨城県出身。明治30（1897）年雲林国語伝習所の助教諭として採用され、同32年大甲公学校校長となる。哲太郎とともに大甲の子弟教育の発展に努める。大正3（1914）年監督責任を問われて辞職となる。大正4年から台北工業学校に嘱託として勤め、昭和2（1927）年書記の身分で退職する。死亡後、昭和14年大甲公学校の卒業生によって記念碑が建立される。



陳瑚 1874-1923

哲太郎の台湾語指導の教師。苑裡房裡出身。父は陳星郎 原籍福建省泉州府同安縣。明治30（1897）年苗栗国語伝習所を卒業する。同32年最初の台湾籍教員となり、2年後、台中新聞社漢文記者となる。翌年2月「組襪社」を組織する。同35年大甲帽蓆株式会社苑裡支部長、苑裡帽蓆株式会社社長 苑裡帽蓆購買業者組合長を歴任する。

米村嘉平

親友。熊本県生まれ、明治30（1897）年歩兵第十三連隊第一大隊土匪討伐台湾分遣隊の軍夫として台湾に渡る。台湾平定後、大甲に住み大甲の市場管理人となる。大正8（1919）年に黄綬褒賞を受賞する。



上野齊

親友。熊本県八代市生まれ、明治39（1906）年台湾総督府の嘱託医として採用され、同40年から台中庁の公医、同44（1911）年に大甲公学校の嘱託医となり、大甲街の蔣公路に上野医院を開業する。浄瑠璃・漢詩が趣味で、哲太郎の教え子留学生に学費支援を行う。また、漢詩を哲太郎に贈る。公医は昭和12（1937）年に退き、大甲で亡くなる。

龍富助

親友。熊本県出身。蔣公路の役場前で旅館「富屋」を開業する。大甲で唯一の日本旅館で、日本人が勤める法院、役場、駅、公学校等の官公庁が多かったことから繁盛する。終戦まで大甲で営業を続け、戦後は久留米で旅館業を行う。



岡村正巳

第2代大甲公学校校長。福岡県出身。明治34年4月1日公学校教諭に任命され、彰化庁彰化公学校に配属される。同36年に同校の校長となり、その後台中庁社頭公学校校長を経て大正3年から大甲公学校校長として赴任する。大正15年9月30日に退職する。

木藤駒次

酒席で哲太郎に盃を投げた怪我させた郵便局長。佐賀県出身、明治30（1897）年台北郵便電信局で六等通信書記として採用され、同35年同局大稻支局長、同38年澎湖郵便電信局通信書記を経て同42年11月から大正2（1913）年まで4年間にわたり大甲郵便局長として赴任する。大稻支局長時代には分限で支局長更迭の処分を受ける。



朱麗 1871-1910

教え子朱江淮の父。大甲街出身。原籍は福建省。明治31（1898）年4月苗栗国語伝習所卒。同36年親友の杜清、李城、李進興、陳瑚などと資金10万円で大甲帽席株式会社を創立して社長に就任し、大甲帽席販売組合長も兼任する。同39年大甲区街長となり、大正元（1912）年台中県初の大甲水路を建設する。また大安溪から水を引いて后里に発電所を建設する。同4年林献堂に協力し、李進興、李城のなど地方地主の寄付を得て、台湾初の公立台中中学校を建設する。明治30年から各種の公職（大甲街副街長、保甲局長、街長、区長、村長）を25年間務める。明治44年11月と大正4年11月に台湾総督府から表彰を受ける。



朱江淮 1904-1995

教え子。大甲平安里出身、父は朱麗。大甲公学校卒。昭和5（1930）年5月台湾電力株式会社に入社する。台湾トップの電気技師で日月潭の発電所を建設し、台湾の電力の普及に貢献する。戦後体制になり同32年8月台湾省政府から建設庁長に任命される。同35年1月に大甲地区繁栄建設促進委員会の名誉副主任委員を担当して「大甲溪の総合開発計画」と「台中港再建」を推進する。その後、台湾肥料会社理事長、中国モーター工事理事長等を歴任する。



杜清 1869-1936

教え子杜香國の父。大甲街出身。原籍福建省泉州。幼く漢学を習い、熱心に公益事業に努める。明治28（1895）年1月大甲撫安局理事となり、鎮瀾宮を修築する。同33年李聰和及び李城と合資会社を設立し、最初の帽席店をはじめて2年後、大甲帽席株式会社を創立する。朱麗が社長と組合長を兼任し、杜清は第2代組合長に就任し、大甲帽席の拡大に貢献する。同42年、その功績が認められ台湾総督府から台湾紳章を受ける。大正3（1914）年大甲帽席購買販売組合を組織し、組合長と台中庁農会評議員を兼任する。同8年台湾帽席業組合連合会副組合長、度量衡販売業を併任し、昭和10（1935）年には第4代大甲信用組合長に選ばれる。



杜香國 1894-1946

教え子。大甲街出身、父は杜清。明治45（1912）年国語師範学校国語部を卒業、同年大甲公学校に帰って教鞭を執る。大正2（1913）年台湾証券株式会社常務取締役位に就任する。日本統治に不満をもって大甲漢学会を組織し、漢学研究の名のもと大衆を集めて反日の講演会を行う。同15年1月10日大甲日新会を創立し、大甲鎮瀾宮で講演を開催して民衆に日本統治反対を呼びかける。昭和11（1936）年杜清が亡くなると杜香國が推挙され鎮瀾宮の管理人となる。同13年大甲商工会会長に就任する。香國は漢学に深く詩文家で大甲蘆社社長を務める。同5年宜蘭の台湾詩報副社長、同17年蓬萊製紙業株式会社社長、大甲信用購買販売組合理事、台中県議会議員などを歴任する。哲太郎と金子校長を敬慕し、両恩師の墓碑建設に尽力する。



武藤友次郎 1867-不明

哲太郎の友人。福島県耶麻郡北山村出身、父は武藤嘉市。明治36（1903）年4月朱麗、杜清、李聰和、李城、李進興及び陳瑚など10万円で大甲帽席株式会社を創設する。友達次郎は若い頃から帽席市場を研究していた関係で同社の顧問となる。この頃哲太郎とソデの男女の仲を確認する。2年後香野一太郎と3万円で吉野家商業株式会社を設立して社長となり、大甲、清水、大阪に工場をつくり、大甲の帽子を製造販売する。友次郎は、それから大甲と清水の工場に漂白設備を設置する。大正9（1920）年大甲庄協議会員、同11年李進興が初代大甲街長になると助役に就任する。同14年5月助役職を柴田一平に引き継ぎ、自らは大甲街協議会員となる。



郭金童 1914-1995

教え子。大甲日南出身、父は郭木火（郭木栄の弟）。昭和3（1928）年大甲公学校卒。李葉奎（大甲街長李進興の四男）と日本へ留学して早稲田中学を卒業する。郭家は米商を営んで郭金童は郷里に帰り水尾でビーフン工場を開く。同23年大甲鎮民代表に当選し2期努める。同26年には大甲鎮長に当選、同28年解任後は蔣公路でカメラ屋を営む。



吳朝宗 1868-1909

教え子吳淮水の父、大甲街出身。台湾割譲の明治28（1895）年、糧食集め、日本軍が大甲街に着くのを待つ。黃照卿、謝漢秋とともに大安港から日本軍を大甲溪の以北に案内する。同30年新竹県参事、大甲街副街長朱麗がすすめる大甲水路建設を支持する。同年4月台湾総督府から紳士章を受ける。同34年大甲公学校新教室建築委員長となり、教室を建設する。このほか大甲帽蓆の渉外を担当し、同36年東京開催の第5回勸業博覧会に台湾館の責任者となって参加し、台湾館が3等賞に入る実績をあげる。



吳淮水 1897-1975

哲太郎の教え子。号は南畝山人、大甲街出身、父は吳朝宗。明治43（1910）年大甲公学校卒業、大正4（1915）年台湾総督府国語学校国語部卒。同年大甲信用組合を創設して常務理事に就任する。同7年大甲帽蓆の輸出に乗り出し、父の外埔村鐵砧山の土地を受け継いで農場とする。大規模土地開発のため、同9（1920）年中南拓殖株式会社を創立して副社長を兼任、同年大甲庄協議会員となる。同10年12月台湾パイナップル拓殖株式会社の役員に就任する。同12年台湾文化協会に参加し、公然と日本統治を批判する。同15年1月10日大甲日新会を創立し、吳淮水が多額を出資して代表に選ばれる。昭和2（1927）年文化協会分裂後、林献堂、蔡培火、蔣渭水などと台湾民衆党を組織し、中央党務委員主任となる。台湾全省の支部創立を推進して大甲支部も同年8月15日に創立する。翌年旗山拓殖会社社長となり、パイナップル栽培、パイナップル缶詰工場を経営して巨大な富を築く。戦後、郭金焜、李燕山、梁財及び林麒麟など老人会を組織し、同43年12月には黃帝神宮を建設する。哲太郎の葬儀で弔辞を読み、生誕百年祭時は主導的役割を果たす。



郭金焜 1897-1978

哲太郎の教え子。大甲街頂店出身、父の郭栄、原籍福建省同安県。大正元（1912）年大甲公学校卒、同5年国語学師範学校卒。大甲、豊原等の公学校教員を務め、台中師範附属小学校教師になる。同13年哲太郎死去に際して、恩師のためと墓地を寄贈する。昭和15（1940）年大甲街助役、戦後5期にわたり大甲鎮長（昭和20～34年）を務め、浄水場拡張、道路・橋の整備、國姓廟古積の整備、堤防の修理、観光の発展、日南地の水害後の復興など自ら駆け回って尽力する。教育界の出身であることから、教育に関心を持ち、戦前は大甲女子家政学校と大甲農業学校を設立し、戦後は大甲中学(高校)を省立化する。同34年鎮長を任期満了して大甲鎮瀾宮の管理委員会の主任委員、台中県仏教理事会主任、黃帝軒轅の管理人などを歴任する。



郭秋漢 1906-1993

教え子。大甲兵營口出身、父は郭燕益。大正9（1920）年大甲公学校卒、昭和2年（1927）台北医学専学校卒。台北赤十字病院に2年間内科医として勤務する。同4年大甲に帰って郭内科病院を開いて、65年間医療業務にあたる。同21年3月大甲鎮代表会的主席に選ばれ、台中県医事公会理事、鐵砧山風景委員、大甲繁栄促進会委員、大甲扶輪社社長、大甲農業水利委員など歴任する。同51年には台中県の模範老人に選ばれる。

菅野政衛 不明-1930

福島県生まれ、大正10（1921）年大甲郡役所警察課大甲分室の主任警部となる。同14年の哲太郎の墓碑建設にあたり、自ら鋤を持ち作業員を指揮して墓園認可に尽力する。昭和5（1930）年霧社公学校の運動会で生蕃の襲撃を受けた霧社事件で犠牲となる。



陳藻芬 1876-1947

文昌校時代の同僚。原名清華、大甲日南出身、父は陳英、原籍福建省。苗栗國語傳習所で日本語を習い、明治32（1899）年3月に卒業する。同年8月18日大甲公学校で教鞭を執り、9年後退職して后里区長となる。大正3（1914）年日南で大甲帽の製造会社を経営する。同9年同区長を辞職し、大甲信用組合常務理事に就任する。その後大甲庄協議会員、農会委員、大日本製糖会社地方委員、日本赤十字社員、日本武徳会会員、大甲水利組合評議員等を歴任する。



李進興 1876-1930

教え子、李欽水の父。大甲街營盤口出身。父は李良、原籍福建省泉州府安溪県。明治32（1899）年大甲の保甲局事務員を担当し、朱麗、李城と義兄弟の契りを結んで共に大甲地区の経済発展に尽力する。同33年大甲街衛生組合委員、大甲壯丁団長、大甲保甲局幹事を歴任する。同34年6月台湾土地調査委員、翌年総督府から表彰を受ける。同36年3月大甲帽席株式会社創立し営業主任となる。同40年12月大甲帽子席同業組合を創立して検査員を担当する。同41年5月帽子製造と原料漂白業を設立する。翌年、大甲帽席同業組合評議員となる。また自分の田畑を大甲公学校に寄付する。大正2（1913）年大甲帽席購買販売組合を創立して理事となる。同8年大甲信用組合理事、翌年大甲庄協議会員及び庄助役を担当する。同11年初代大甲街長に就任し、同年台湾紳章を受ける。翌年大甲公学校高等科を増設、昭和2（1927）年4月1日文昌祠の近くに大甲女子公学校を創立する。同年5月12日長女の李瓊梅は大甲前庄長朱麗の次男朱江淮に嫁がせる。同3年11月自家花園に洋式建築「臥龍居」が落成し、台湾総督府の官吏の提案で「宜園」と改名し、台湾で有名な菊を観る名園となる。李進興は生涯にわたって公益に尽す。



李欽水 1895-1932

教え子。大甲街營盤口人、父は李進興。明治42（1909）年大甲公学校卒、大正4（1915）年台湾総督府国語師範学校を卒業して大甲に帰り、大甲公学校で教鞭を執る。呉墩禮の姉呉柳を妻とする。同7年大甲街役場の書記、同11年同役場の会計役となる。台湾文化協会成立後、各地で反日運動が高まると大甲で大甲漢学会、大甲日新会、大甲読書会など師範学校卒業生を中心に創立した組織づくりに尽力する。大甲日新会は、日本人追放を目的にしている李欽水は幹事となり、大甲の文化講演で司会を務める。父の李進興も名誉会員に選出される。昭和2年（1927）李欽水は実業界に入り、中央製氷会社専務取締役役に就任する。同5年李進興死亡後は、大甲帽の家業を継ぐ。



李炳焜 1898-1949

教え子。大甲文武里出身。父は李進興。幼少から漢学を習い、明治45（1912）年大甲公学校を卒業する。淡水中学校から京都の同志社大学に留学し、同大学卒業後、神戸で大甲帽輸出業の拡大を図る。大正14（1925）年台湾日日新報大甲街駐在の記者となる。昭和5（1930）年父死亡後、弟葉壁も同年6月、2年後には兄李欽水が亡くなり、家業の帽席業は人に貸して自らは大甲營盤口区委員を務める。



陳 煌 1891-1951

教え子。大甲奉化里出身、父は陳鳳。明治42（1909）年大甲公学校卒、大正2（1913）年国語師範学校卒。同年神戸で大甲帽輸出の商売をはじめ。同4年台湾に帰り大甲信用組合を組織し常務理事に就任する。同9年大甲庄協議会員となり、電話・電燈・電線架設に尽力する。昭和元（1926）年米穀商を営みながら大東信託株式会社を創設し、理事と台北支店長を兼務する。その後大甲興業株式会社を設立し、昭和21年第1回大甲鎮民代表選挙に当選する。



許 等 1908-1962

教え子。大甲頂店田中仔出身、父は許加、原籍為福建省惠安県。大正12（1923）年大甲公学校、同14年高等科、昭和4（1929）年嘉義農林学校をそれぞれ卒業する。農林学校卒業後は大甲街役場に勤務する。同10年10月大甲街協議会員となり、翌年11月豊農株式会社常務理事を務め、大甲街役助役となる。同20年大甲鎮副鎮長、同28年第2回台中県議会議員に当選する。その後台中県農会理事、台中県議会秘書、台中县政府秘書等を歴任する。



郭火旺 1901-1955

教え子。大甲街營盤口出身。原籍福建泉州府。父は郭燕益。大正4（1915）年大甲公学校卒、父の郭燕益の薬局を受け継いで漢方薬店と整骨業を行う。郭燕益、郭火旺、郭必祖の3代にわたり医療業務で貢献する。



陳 焮 1893-1947

教え子。大甲社尾（奉化里）出身。父は陳鳳。原籍は福建泉州。祖父陳全は大甲社尾の大地主。明治42（1909）年大甲公学校卒、大正2（1913）年国語師範部学校卒。同年大甲公学校で教鞭を執るが、2年後教職を辞め、慶応義塾大学に留学する。同9年東京で新民会に加わり、民族運動に参加する。台南の名門の謝石秋の娘謝綺蘭と結婚する。同12年アメリカのコロンビア大学経済学部にも再び留学し、金融経済修士号を得る。同14年7月台湾文化協会主催の夏季学校の講師を務める。昭和2（1927）年、民族運動の資金、台湾人の経済組織として日本企業に対抗するため、林猷堂、吳子瑜、劉明哲等と台中市栄町に大東信託株式会社を設立する。理事が台中の地主（台湾文化協会の支持者）、林猷堂が社長、陳焮が専務取締役役に就任する。当時台湾の金融は日本人の手によって操作されていて会社は民族運動資金の金庫となる。同5年台中州協議会員になり、州政治に参加する。同16年皇民奉公会中央本部委員及び台中州支部生活部長、翌年台中商工会議所副会長となる。同19年大東信託は、屏東信託台湾興業信託と合併して台湾信託株式会社を創立する。社長は台湾銀行の日本人が担当し、陳焮は専務取締役となる。戦後、陳焮と林猷堂など6人で南京で行われた日本降伏式典に出席する。翌年台湾信託株式会社は台湾信託会社となって、陳焮がこの会社の主任委員となる。同22年3月11日に二二八事件で国民党軍に逮捕されて不幸にも殺される。



黃垚龍 1897-1941

教え子。大甲六塊厝出身。父は黃水來。大正元（1912）年大甲公学校卒。同9年4月大安中庄公学校で教師をした後、同12年3月大甲街役所で書記を務める。昭和4（1929）年父逝去後、大甲街役場を辞職し家業を継ぐ。同年土地整理委員、大甲溪北岸水防組合評議員、同6年大甲水利組合評議員、翌年任大甲街協議会員、大甲街帽子生産者組合評議員、大甲郡米穀統制組合総代、大甲街農業組合評議員、大甲街三大事業期成同盟評議員、大甲街六塊厝区委員、大甲信用組合脱退者審査委員、社会教委員、大甲街鎮瀾宮評議員、六塊厝部落振興会長、六塊厝農事改良実行組合長、金華堂評議員、大甲街常設委員、大甲街方面委員、大甲保健組合理事等を歴任する。



王 錐 1898-1978

教え子。大甲街營盤口（文武里）出身。父は王順德。明治44（1911）年大甲公学校卒、外埔で砂糖製造業を9年、練瓦製造業を6年行い、大正13年（1924）4月大甲街で大甲帽輸出業を行う。大甲帽蓆同業組合評議員、大甲帽蓆連合会代表員、大甲水利組合評議員、大甲信用組合理事、旗山拓植株式会社理事、大甲商工会理事、中南拓殖会社理事等を歴任しながら台湾民衆党中央執行委員、大甲支部主幹を務める。同21年4月台中県議会議員に当選し、政治家として活躍する。



鄭進丁 1899-1985

教え子。大甲街山脚出身。父は鄭蟻、原籍福建省漳州。明治45（1912）年大甲公学校卒。大正7（1918）年大甲街役場で書記を務める。同10年台中州第1回街庄吏員講習会で優秀な成績を修め知事より表彰を受ける。同12年10月同役場の会計役となる。同年大甲郡連合街庄吏員研究会で学識経験首位で台湾紳章を受ける。鄭進丁はキリスト教徒となって大甲教会伝道局理事を務め、大甲信用販売購買利用組合監事も兼ねる。昭和5（1930）年自治施行十周年に際して州知事から表彰を受ける。同年1月10日街長李進興氏が死亡すると柴田一平氏が街長に就任した際、助役に任命される。戦後は台北で貿易会社を創立する。その後、台北基督教青年會（YMCA）創設し、台北馬偕医院理事長を務める。同51年に全国模範の父親に選ばれる。



劉雲騰 1909-1978

教え子。大甲街後厝仔（武陵里）出身。父は劉全、母は林早。大正13（1924）年大甲公学校卒、同15年同校高等科卒。昭和21（1946）年武陵里里長、同年3月大甲鎮民代表にそれぞれ当選し、同23年大甲鎮民代表会主席に就任する。同26年大甲鎮農会理事主席に就任し、台中県議会議員にも当選する。同28～同44年同農会の業績を向上させ、その実績から同44年に台中県農会総幹事となる。



王對 1903-1943

教え子。大甲出身、原籍福建省泉州府。父は王培。大正7（1918）年大甲公学校卒。同11年嘉義農林学校卒業後、同年台中州農会大甲支会長、豊農株式会社社長、南投製氷株式会社常務理事、中南拓殖株式会社常務理事及旗山拓殖会社理事等を歴任する。昭和8（1933）年4月大甲街方面委員となり、貧困者の救済に努め街民から尊敬を受ける。翌年大甲街協議会員、大甲街常設委員、大甲郡米穀統制組合総代を歴任後、同25年10月の第3回大甲鎮代表に当選し、同28年大甲鎮農会監事を務め台中県議会議員となる。



李燕山 1913-1996

志賀墓園を土砂から護った教え子。大甲庄尾出身。父は李聰和。昭和4（1929）年大甲公学校高等科を卒業する。父の友人李城、杜清が開設した元泰商店で勤める。翌年神戸支店で営業を担当する。同9年8月李皆得、李萬春らと大甲庄尾で三元商店を創立し、大甲帽専門店を経営して日本への輸出のため神戸出張員となる。戦後、三元商店は陳啟明の徳明商店と合併し、徳元商店となる。米国の帽子王と契約し米国への輸出を開始する。同21年2月平安里里長に当選し、同年3月29日大甲鎮鎮民代表に当選する。同22年11月18日吳墩禮、陳啟明、黄金爐及び張丁貴と大甲鎮で台中県帽蓆商業同業公会を設立して理事に就任する。晩年は台中県立文化センターの事業に協力する。



莊龍 1874-1925

大甲公学校時代の同僚。大甲庄尾出身、父は莊監。明治36（1903）年国語学校卒業後、大甲公学校で教鞭を執る。同39年櫟社に加盟する。霧峰の林家の近くの台中新聞社に移籍する。詩を好み大甲の「蘅社」（詩社）の第一人者である。



許天奎 1883-1936

教え子教師。外埔鐵砧山出身、父は許其琛。明治38（1905）年大甲公学校卒業、同42年3月国語学校師範部卒業し、大甲公学校で教鞭を執る。哲太郎の勤続13年の厄払いの会では発起人となる。大正2（1913）年大甲信用組合評定委員、同8年大甲帽蓆同業組合長、翌年任外埔庄協議会員及外埔庄助役、同12年11月外埔庄長（2期）、大甲中南拓殖株式会社社長、外埔信用組合理事等を歴任する。



林麒麟 1887-1977

教え子。大甲下山脚（岷山里）出身。父は林金壽。明治40（1907）年大甲公学校卒。同44年国語学校師範部卒業後、后里公学校で教鞭を執る。教員退職後、大正4（1915）年大甲信用組合任書記、同組合長を勤める。大甲街に元泰商店（建材商）を設立する。同11年に大甲街協議会員となり、昭和10（1935）年大甲街役所から表彰を受ける。その後、大甲救助委員常設委員、大甲水利組合評議会員、大甲郡米穀統制組合特別総代を歴任し、戦後は台中県帽蓆商業同業公会常務監事を務める。



杜瑞抱 1891-1967

教え子教師。大甲街東門出身。父は杜富春。祖籍福建省泉州府。明治40（1907）年大甲公学校卒、大正2（1913）年国語学校師範部乙科卒。大甲公学校で25年教鞭を執り、英才育成は無数で昭和13（1938）年に辞職する。土城一帯の荒地を開墾し農場にする。翌年百貨店「太陽商会」を経営、同16年大甲信用組合監事、大甲郡商業協會理事を歴任する。



王元吉 1895-1967

教え子。大甲出身。原籍福建省泉州、父は王清潭。明治43（1910）年大甲公学校卒。王明記事務所で不動産を経営する。新竹帽子株式会社、旗山拓殖会社、中南拓殖株式会社各社で理事を務める。昭和6（1931）年7月大甲共友商店（大甲帽輸出）と文友社（文具印刷）を設立する。翌年大甲街協議会員となる。また吳淮水、吳淮澄、彭清靠等と義兄弟の契りを結ぶ。林氏湘雲（元大甲公学校教師）と結婚し、六男王茂雄が大甲で王元吉連合診所を開き、元吉は院長に就任する。戦後は台湾総統府の国策顧問として活躍する。



黄清波 1891-1966

教え子教師。大甲社尾庄出身。父は黄振金、原籍福建省。明治37（1904）年大甲公学校卒、同44年国語学校国語部卒業後、大甲公学校で教鞭をとる。1年後実業界入りし、林投帽蓆製造販売業を経営する。大正4（1915）年大甲信用組合創立して専務理事となる。その後、大安漁業会社社長、中南拓殖会社監察及び大甲公学校学務委員、保甲連合会会長を歴任する。同6年には台湾総督府から台湾紳章を受章する。同9年10月大甲街協議会員に当選し、大甲水利組合評議員も努める。翌年、台湾保甲制度に不満をもち、保甲連合会長を辞職し、同時に台湾文化協会に参加する。大甲日新会及び自治連盟ができ幹事となる。演説会を開き、台湾人の民族意識を喚起する。同13年陳焯が米国コロンビア大学から帰って来て、林献堂、劉明哲らと大東信託株式会社を設立し、日本人の金融独占を阻止する。昭和7（1927）年同社に入社し、2年後経理兼信託課長となり、積極的に台湾同胞の福利を図る。西洋バロック式別荘の壁には英語で「自由と平等」と書かれている。



黄清本 1894-1958

教え子教師。大甲社尾庄出身。父は黄振金、祖籍福建省泉州府。明治44（1911）年大甲公学校卒、大正3（1914）年国語学校師範部卒。大甲公学校及び后里公学校で教師を20年間勤める。昭和9（1934）年退職し、大甲街協議会員となる。兄の黄清波を引き継いで大東信託株式会社の経理兼信託課長に就任する。同28年吳墩禮、易金枝、楊緒乾、許雲陽等と合資会社大甲製粉設立し理事長につく。清水の蔡秀茶と結婚後、台中市の株式会社三振商店社長、同市商工会議所の役員等を歴任する。



杜聰朝 1897-1982

教え子教師。大甲出身。父は杜皆得、原籍福建省。明治45（1912）年大甲公学校卒。大正5（1916）年国語学校師範部卒。磁磻公学校、大甲公学校及大甲女子公学校で教師を13年間勤める。昭和4（1929）年実業界に入り、大甲駅前日勝材木店を開業する。同時に明治生命保険大甲代理店を兼務する。2年後、大甲商工会会長、同7年大甲街協議会員、大甲公学校及び大甲女子公学校の父兄会長、社会教化委員、大甲鎮農会常務監事等を歴任する。



黄直發 1897-1982

教え子。大甲庄尾出身。父は黄木才。酒類の仲買人で富を築く。明治44（1910）年大甲公学校卒。大正9（1920）年地方自治に対して、大きな抱負を持ち大甲の議員として長年尽力する。父が昭和6（1931）年に亡くなってから酒販売業を引き継ぎ、同10年5月に大甲南門口順天路に6階建てビル2棟を建設して南興建築材料工場を開設する。



陳啟明 1898-1970

教え子。大甲社尾出身。父は陳阿呆。明治44（1911）年大甲公学校卒。李聰和の元泰帽蓆商店に雇われ、大正5（1916）年大甲帽蓆事業を始める。同11年11月大甲帽の店を開業し、当時、台湾最大の帽子商となる。同14年王昭徳と共同で徳明帽蓆商店を開設し、王爺廟に製帽工場を設立する。女子織工を雇い、研究開発に努め新しい技術により営業は向上する。昭和9（1934）年12月新竹市に新竹州帽子株式会社設立し、社長に就任する。戦後、李燕山の三元商店と合併し、台湾中部一の帽子商となる。同22年友人張丁貴、吳墩禮及び黄金爐と台中県帽蓆商業同業公会を創立する。



陳後成 1902-1954

教え子。大甲日南出身。父は陳清吉、原籍為福建省。大正7（1918）年大甲公学校卒、同10年台北工業学校家具科卒。淡水の豪商黄東茂の店に勤める。同13年大甲日南で米穀及び甘蔗の栽培を行う。日南区委員、日南保甲連合会長、社会教化委員、農業組合委員等を歴任する。昭和9（1934）年大甲街協議会員に選ばれ、日南の九里の用水路が長年修理されず灌漑ができなかったことから用水路を修理し、300余りの田畑を水田とし生産向上に貢献する。また電燈施設と派出所の増設にも力を注ぐ。同21年大甲鎮民代表に当選し、その後、台中県議会議員として活躍する。



陳嘉瑜 1888-1933

教え子教師。筆名は懷瑾、大甲庄尾出身、父は陳金八。原籍は福建省。幼年は、陳藻芬と鄭子香に漢学を習う。明治37(1904)年大甲公学校第1回卒業生、同42年国語学校師範部卒業後、母校大甲公学校に帰り教師となる。教育界に20年間勤め、昭和4

(1929)年辞職する。大甲公学校勤務期間も、文昌祠で漢学を学ぶ人のため、漢学クラスを開いて教授し、大甲の漢学の基礎をつくる。大部分が陳嘉瑜、陳嘉邦兄弟の授業を受ける。莊龍、許天奎、汪清水、陳庸、郭彩鳳、陳藻芬、杜香國等と詩人組織「蘅社」創立するなど教育界に力を注ぐ。



陳嘉邦 1891-1945

教え子教師。大甲庄尾出身。父は陳金八，原籍福建省。幼年は日南の陳藻芬と大甲街の鄭子香から漢学を習う。明治38(1905)年大甲公学校卒、台北国語学校師範部で優秀な成績を修め、台湾総督府から日本に研修派遣される。同43年師範部を卒業後、神岡公学校で教師となる。汪清水の妹、汪朱と結婚する。大正4(1915)年大甲公学校で教鞭をとるが、大甲警察分室主任八木田正(台北国語学校の同窓)の影響により、教職を辞職し、同6年司法書士となる。同10年大甲漢学会を組織し、同15年大甲日新会に入り鎮瀾宮北廂の部屋で蔡培火、蔣渭水等を招いて演説させ、抗日運動、愛国心を呼びかける。昭和4(1929)年陳嘉邦は、清水の台湾文化協会員の紫雲巖の演講要請を受け、監視の日本警察がこのことを大甲郡守に報告したことにより検挙され、司法書士の免許を剥奪される。同年陳嘉邦は廈門へ渡り、漁業養殖事業に従事する。



王守信 1904-1963

教え子。外埔出身。父は王大猶。大正7(1918)年大甲公学校卒。淡水中学校卒業後、台南神学院に進む。郷里に帰り、さとうきびの栽培で砂糖の生産を向上させる。大甲街に三栄商会を創設して医薬販売を行う。第一次世界大戦後、世界各国が社会福祉を重視するようになり、台中州で社会福祉制度を推進する。昭和7(1932)年、三栄実費医院を創設し、無料で貧しい患者を診療する。大甲や外埔の住民のため、慈善事業を推進し、同9年には大甲教会堂を再建する。また外埔の壮丁团团長、部落振興会副会長等も務める。



王守勇 1917-1972

教え子。外埔出身。父は王大猶。大正6(1917)年大甲公学校卒。同11年淡水中学校卒。同15年京都の同志社中学に留学、3年後同志社大学で文学士の学位を取得する。台湾に帰り、麻豆教会の伝道師となる。翌年牧師となり、台南と台湾神学院を担当し、台湾教会新聞社編集長、昭和11(1936)年大甲教会基督教長老会議長、同19年「日本基督教団」台湾教区区長、同20年彰化女子高商校長、同23年淡江中学校長、同25年台北の李春生紀念教会牧師、同30年台北の永樂教会の牧師等を歴任する。



朱青松 1898-1960

教え子。大甲街出身、父は朱麗、原籍福建省平和県。11歳の時に京都の同志社中学へ留学する。これは大甲地区の第一号の留学生である。大正13年(1924)台北医学専門学校を卒業し、公立台東医院内科部で勤務する。3年後、郷里に帰り、順天路沿いに「青松医院」を開業し街民の診療にあたる。



張其來 1899-1980

教え子。后里出身、父は張安麟。大正2(1913)年大甲公学校卒、大甲庄尾で三益練瓦を経営する。台湾文化協会、その後台湾民衆党に入る。戦後は、鐵砧山の土地を買い取って九つの球場、子供の遊園地などの建設する。昭和50(1975)年には育樂活動センターを落成させて民衆に開放し、平成13(2001)年には松柏老人ホームを完成させるなど大甲社会の公益に貢献する。



黃並傳 1887-

教え子教師。大甲朝陽里出身。明治37(1904)年大甲公学校第1回卒業生。同42年台湾総督府国語学校師範部卒。大甲公学校で教鞭を執り、大甲の教育界に尽力する。



吳墩禮 1905-1986

教え子。營盤口出身。父は吳文。原籍は福建省。大正8（1919）年大甲公学校卒。同11年台湾商工学校卒。北京大学法学院で政治学を専攻する。北京大学卒業後、東京帝国大学で、政治経済を学び北京大学に戻り同大学の教授となる。昭和21（1946）年台湾に帰り、大甲帽蓆事業を経営する。同28年朱江淮とともに大甲中学を省立に、同42年政府と交渉し、鐵砧山を台中県特定風景区にする。その後小麦粉工業同業組合理事長、台湾区植物油制煉工業同業組合理事長、ダイズ加工油（脂）工場委員会主任委員、全国総工合理事、中華民国ビジネス仲裁員等を歴任するとともに、南華化学工業会社、大甲製粉工場、竹南油脂工場、台湾製鉄株式会社等の創設にも尽力する。



黃江鎮 1910-1983

教え子。大甲朝陽里人、父は黃並傳。大甲公学校卒業後、台中師範学校に進学する。昭和6（1931）年郷里に帰り、台中外埔公学校、西岐公学校及び大甲女子公学校で教鞭を執る。同10年李彩霞と結婚して2年後、教職を辞職し日本へ留学する。日本では明治大学で法学士、日本大学歯学部で歯学士を取得する。日中戦争がはじまると祖国に戻り、軍人として遊撃隊を組織して戦争に参加する。戦後、南京同郷人会会長を務める。同22年に台湾に帰り、翌年、教職に復帰し台北に住む。省立台中保育園園長を務め、同25年省教育庁視学官に就任して中正幼稚園などを創設する。同37年恩師志賀哲太郎の伝記に着手して、同49年に出版する。墓は台北にある。



張全圭 1906-1939

教え子。大甲横圳（武曲里）出身。父は張君旺。大正9（1920）年大甲公学校卒。同14年台北師範学校卒。大甲公学校及び大甲女子公学校の教師となる。昭和9（1934）年父の逝去に伴い教師を辞め、翌年10月大甲街方面委員及社会福祉事業助成会評議員等に就任する。同12年11月大甲街協議会員に当選し、その後大甲信用組合監事を務める。



吳墩燦 1909-1986

教え子。大甲營盤口（文武里）出身。父は吳文、原籍為福建省泉州。大正12（1923）年大甲公学校卒、昭和2（1927）年台中州立台中第一中学校卒。中学卒業後、台湾製鉄工業株式会社に入社して工場長となり、その後大甲製粉工場理事、南華化学工業会社理事、台湾化学工業会社社長等を歴任する。



張建墻 1911-1992

教え子。大甲頂店出身。大正13（1924）年大甲公学校卒。台中師範学校に進学し、抜群の成績を修める。2学年の郊外写生で、油絵を描き、先生の賛美を受ける。昭和4（1929）年学内に「水辺会」絵社を創立して台中の芸術家の活発化に貢献する。指導教官は、美術の進藤常雄で、翌年3月1等級の教師許可証を得て師範学校を卒業する。それから新厝公学校で教鞭を執り、このとき山水画を書く。同9年は肺結核のため、教職を離れ、以後、生活困難、絵を描けず大甲に帰って米の商売をするが失敗する。2年後に大甲帽子連合会秘書を務め、妻が洋裁業で支えた。真珠湾攻撃直後、軍夫として召集され、蘇州に行く。戦後、台北市の建設の仕事を行い、同28年絵筆、同53年に米国に移民し、日本語散文の詩集「赤道と太陽」を書く。この詩集に「恩師志賀哲太郎頌」がある。



柴田一平1878-

哲太郎寄贈の書籍で図書館建設。熊本県出身。明治44（1911）年澎湖庁警務課警部補、大正10（1921）年3月高雄州東港郡庶務課長、同14年5月大甲街助役となる。大甲街長李進興が昭和5（1930）年1月11日死亡したことで同年2月第2代大甲街長に就任する。水利組合評議員も兼任し、日南公学校頂後厝分校の設立、大甲街第一消費市場、大甲信用組合庁舎の建設、大甲農国民学校の創設、志賀文庫の鎮瀾宮街立図書館の設立等の多くの功績を残す。

3 行政・業者等一覽

○ 行政官

1	苗栗支庁長	横堀三子	明治29(1896)年
2	大甲弁務署長	熊谷直亮	明治30(1897)年
3	苗栗弁務署長	鳥居和邦	同上
4	同上	冢永泰吉郎	明治32(1899)年
5	大甲支庁長	内田松彦	明治35(1902)年
6	同上	三上喜千藏	明治37(1904)年
7	同上	時枝磯吉	明治39(1906)年
8	同上	河瀬木藏	明治40(1907)年
9	同上	四宮義親	大正2(1913)年
10	同上	尚澤伊藏	大正7(1918)年
11	同上	中山吉三郎	大正9(1920)年
12	大甲郡守	細井鶴三郎	同上
13	同上	齊藤透	大正11(1922)年
14	同上	池田壯太郎	大正13(1924)年

○ 行政官街庄区

	氏名	役職	在任期間
1	黄海	大甲街長	明治30(1897)年～
2	謝漢秋	同上	明治34(1901)年～
3	朱麗	大甲区街長	明治39(1906)年～
4	同上	大甲区區長	明治43(1910)年～
5	同上	大甲庄庄長	大正9(1920)年～
6	李進興	大甲街長	大正11(1922)年～
7	柴田一平	大甲街長	昭和5(1930)年～

○ 大甲選任民意代表者

名称	氏名	在任期間
台中州協議會員	陳焯	昭和5(1930)年～
同上	王燕翼	昭和7(1932)年～
台中州會議員	高積前	昭和11(1936)年～
台中市會議員	黃棟	昭和15(1940)年～
大甲庄(街)協議會	岡村正巳	大正9(1920)年～

○ 大甲地区上級機關沿革

1	明治28(1895)年	一県二民政支部一庁	台湾民政支部轄中部地区苗栗出張所
2	明治29(1896)年	三県一庁	台中県苗栗支庁
3	明治30(1897)年	六県三庁	新竹県大甲弁務署
4	明治31(1898)年	三県三庁	台中県大甲弁務署
5	明治34(1901)年	二十庁	苗栗庁大甲支庁
6	明治42(1909)年	十二庁	台中庁大甲支庁
7	大正9(1920)年	五洲二庁	台中州大甲郡

○ 大甲街(庄)協議會員

氏名	在任期間	氏名	在任期間
長島專志	大正9(1920)年～大正11(1922)年	鄭火刀	大正13(1924)年～昭和9(1934)年
富井雖次	大正9(1920)年～大正11(1922)年	李萬青	大正13(1924)年～昭和11(1936)年
武藤友次郎	大正9(1920)年～大正11(1922)年	今井高次郎	昭和3(1928)年～昭和20(1945)年
井坂虎松	大正9(1920)年～昭和3(1928)年	武藤友次郎	昭和3(1928)年～昭和9(1934)年
黃清波	大正9(1920)年～昭和9(1934)年	一村昱朗	昭和5(1930)年～昭和9(1934)年
陳藻芬	大正9(1920)年～昭和9(1934)年	李榮仔	昭和5(1930)年～昭和11(1936)年
吳淮水	大正9(1920)年～大正11(1922)年	石田米吉	昭和5(1930)年～昭和7(1932)年
李進興	大正9(1920)年～大正11(1922)年	田讚緒	昭和5(1930)年～昭和7(1932)年
陳煌	大正9(1920)年～昭和3(1928)年	彭清靠	昭和7(1932)年～昭和9(1934)年
李春山	大正9(1920)年～大正11(1922)年	杜聰朝	昭和7(1932)年～昭和11(1936)年
王燕翼	大正9(1920)年～昭和7(1932)年	王元吉	昭和7(1932)年～昭和9(1934)年
黃直發	大正9(1920)年～大正11(1922)年	黃堯龍	昭和7(1932)年～昭和16(1941)年
彭清靠	大正9(1920)年～大正13(1924)年	富井雖次	昭和9(1934)年～昭和11(1936)年
上野齊	大正11(1922)年～昭和20(1945)年	高積前	昭和9(1934)年～昭和14(1939)年
柯清標	大正11(1922)年～昭和1(1926)年	王對	昭和9(1934)年～昭和20(1945)年
林麒麟	大正11(1922)年～昭和20(1945)年	矢住信夫	昭和9(1934)年～昭和20(1945)年
郭木榮	大正11(1922)年～昭和11(1936)年	何永	昭和9(1934)年～昭和20(1945)年
岩元義盛	大正11(1922)年～昭和1(1926)年	陳後成	昭和9(1934)年～昭和20(1945)年
梁成	大正13(1924)年～昭和1(1926)年	黃清木	昭和9(1934)年～昭和20(1945)年
林天生	大正13(1924)年～昭和5(1930)年	陳藻芬	昭和11(1936)年～昭和15(1940)年

○ 大甲街商工業者名簿 (昭和5年)

業種	商号	責任者	業種	商号	責任者	業種	商号	責任者
電力	台湾電力(株)	大甲散宿所	雜貨	金振興	易瑞	同上	吉昌材木店	邱阿魁
鐵道	大日本製糖(株)	大甲駅	雜貨	永聯興	柯金石	同上	興利	陳樹波
運送	丸セ	柯德美	同上	同上	李心	同上	勝興	李冬
同上	同上	何永	同上	瑞興	高金波	兵服	泉錦	卓見福
同上	同上	蔡新田	同上	王和成	王海福	同上	泉順	卓登桂
同上	丸山	柯鴻壺	同上	金興發	黃清吉	同上	和發	周喜
運輸	共榮自動車(合)	張泰壽	酒	勝吉	黃木才	同上	金聯發	李水來
同上	大甲自動車商会	劉瑞星	海產物	藍乾魚	張春木	同上	周茂興	周潤嘴
勞力	大甲駅作業団	柯德美	肉		郭岳	同上	仁義	陳漢
米	永泉興	高池	同上		葉水生	同上	同上	王木
同上	裕豐	吳三天	同上		黃貞	兵服	邱吉昌	邱阿魁
同上	同上	郭木來	同上		黃灶	同上	ゼシガー	大甲分店
同上	振昌	陳清讚	同上		陳阿貢	和洋雜貨	金聯美	
同上	大和精米場	黃溪泉	同上		許井		永泉來	謝俊成
同上	復發	陳水旺	同上		郭良	料理	大西園	吳陳氏惜
同上	同上	王海財	同上		李萬吉		水心園	三炮
同上	同上	會昔	同上		周牛		平和樓	郭青蕃
同上	同上	洪期	同上		一村昱朗		醉花天	阿國
同上	協發	李貼界	煙草		朱麗		日新樓	蘇完
大甲帽	元泰	李皆得	菓種		李朝旺		觀海樓	劉氏仁
同上	同上	柯清河	同上		葉秋木	料理	知味樓	易旺
同上	同上	王昭德	同上	勝安	柯水榮	旅館	大新旅館	李樹根
同上	同上	王維	建材	元泰	林麒麟		富屋	龍富助
同上	同上	堀江銀三郎						
同上	德明帽蓆商会	陳啟明	○ 大甲模範表彰					
同上	共榮帽子商会	木村忠次郎	朱麗	平安里	大正3(1914)年	台中庁表彰(米改良)		
糖油米	金振益	葉火炎	郭金焜	頂店里	大正12(1923)年	瑞宝勳章(台中師範漢文教師表現優秀)		
同上	金德昌	周醜	李萬青	義和里	昭和5(1930)年	台中州津知事表彰(地方開發貢獻)		
同上	東和	林元	鄭進丁	薰風里	昭和5(1930)年	台中州津知事表彰		
同上	東興商店	柯旺	陳坤龍	日南里	昭和5(1930)年	台中州津知事表彰(土地整理委員20年功勞)		
同上	新勝順	黃獅	黃堯龍	文曲里	昭和7(1932)年	台中州津知事表彰(大甲街防衛團宣傳班長優良)		
同上	源益	曾泉	王燕翼	孔門里	昭和7(1932)年	台中州津知事表彰(地方自治貢獻)		
同上	日益	陳恭	朱江淮	平安里	昭和31(1956)年	總統表彰(經濟部特優)		

○大甲醫師

姓名	出身地	卒業学校名	病院名	父親
上野齊	熊本県		上野医院	
朱青松	平安里	總督府台北医学専門学校	青松医院	朱麗
王元圭	孔門里	總督府台北医学専門学校	妙生医院	王清潭
林士安			杏林医院	
李凌川			體生医院	
郭秋漢	文武里	總督府台北医学専門学校	郭内科医院	郭燕益
李闊嘴	義和里	中医師	體仁堂藥店	李心匏
李澤民	義和里	總督府台北医学専門学校		李註有
陳煌	文曲里	總督府農事試驗場獸医科	獸医所	陳縲
詹霖仁			中和医院	

○ 總督府台湾紳章受章

吳朝宗	明治30(1897)年4月
杜清	明治44(1911)年11月
朱麗	明治44(1911)年11月
黃清波	大正6(1917)年

4 親書

○ 大甲鎮長の親書(平成元年1月)

平成元年1月9日、「舩船」(もやいぶね)主宰・永田日出男氏は、大甲鎮長宛ての川口卯一益城町長のメッセージを携えて大甲鎮公所を訪ねた。鐵砧山の志賀先生墓所への墓参には、鎮長を先頭に鎮の助役、議長、議会事務局長、公所幹部、校長、有志多数が車を連ねて同行してくれた。舗装された大きな道路から墓碑まで約150メートルあるが、永田氏が老人であることを事前に知った鎮長は、墓碑への細い山道を舗装し、前日1月8日までに工事を終えたとのことだった。また、昼食後も、鎮長らは公務をおいて名勝地を何か所も案内してくれたという。永田氏は、志賀先生の墓参に来たというだけでこのような歓待を受けたことは、志賀先生が大甲鎮民から如何に尊崇されておられるのかを伺うに足る十分な出来事であったと語っている。(鎮=町に相当。現在は区)

下の手紙は、当時、大甲鎮長から益城町長に届けられた親書である。

謹啓
舩船主宰 永田日出男様御来
の折リ訂重に御挨拶確に
受領致しました。私事 中華民国
台湾省 中縣 大甲鎮 鎮長 林英
雄 謹とて 鎮民一同を代表して 日本
熊本縣 上益城郡 益城町 長 殿 川
口卯一様 及び 益城地方の皆様方
並に 関係者の 有老に 御挨拶申し上
げます。

貴地出身者で 御座居ます。志賀哲
太郎先生は 高邁なる 人格を 未だ
甲の 學子も 輩出し、國民 民間の 隔
りの ない 愛を 込めた 態度で 台湾 人教
育に 一生を 捧げた 志操に 共其の 先
人から 其の子孫に 語り 継ぐ べく 御座
います。志賀先生が 教養も 取って 居ま

した 大甲 國民學校は 新し、校舍に 移り
舊校舍は 今では 市街中心に 有り 夜市の
繁華街に 有り ました。其の 始めの
居住所 文昌宮 西廂は 今日 尚 三級古
跡として 政府に 指定さ れて あります。
確に 人道を 基調とし 慈悲の 精神を
もつて 尚 時 頑民地 台湾 民衆と 學生の
教育に 當れ、貴先生の 民族を 越へ
た 偉大なる 愛を 私共は 是認し
尊敬する 事に 各々 及び 有り ます。
同じ 黄を 人種と 同 漢語 文化系 の 日本
人と 中國人は 現在 全世界の 注目 を 浴
びて ます。力 特に 縁の 深い 台湾 大甲と
御當地との 親善は 私達の 念願する
所 であり ます。志賀先生 の 墓及び 紀
念碑は 数少い 愛弟子 志賀 山先生
等 地方有志が 協力し 七 関心して 居まな
の 御 志心 下さつ。永田様 御一同 来名

の 折リ 訂重に 御傳言 誠に 恐縮の
至り ます。

現在 始め 多く の 若い 世代は 尚 日本
語を 解さ ない ため 心の中は 尚 日
本の 皆様方 貴正と 勤勉と 世界の
トップに 立つて 努力して 居る 事
兄弟の 心情と 遠く 昔かうの まにに 依然と
理解して 居る のか 多くの 台湾の 人の 心
の 底に 流れて 居る 實状が 有ります。
では やはり 志賀先生 の 御冥福を 祈り
します。同時に 川口町長 殿並に 益
城地方の 皆様方 の 御健康と 御多福
を 祈り ついて 御挨拶 致します。
粗文 乱字 書き 有 承 存い 為 御容 敬
御 確に 申し 上げ ます。

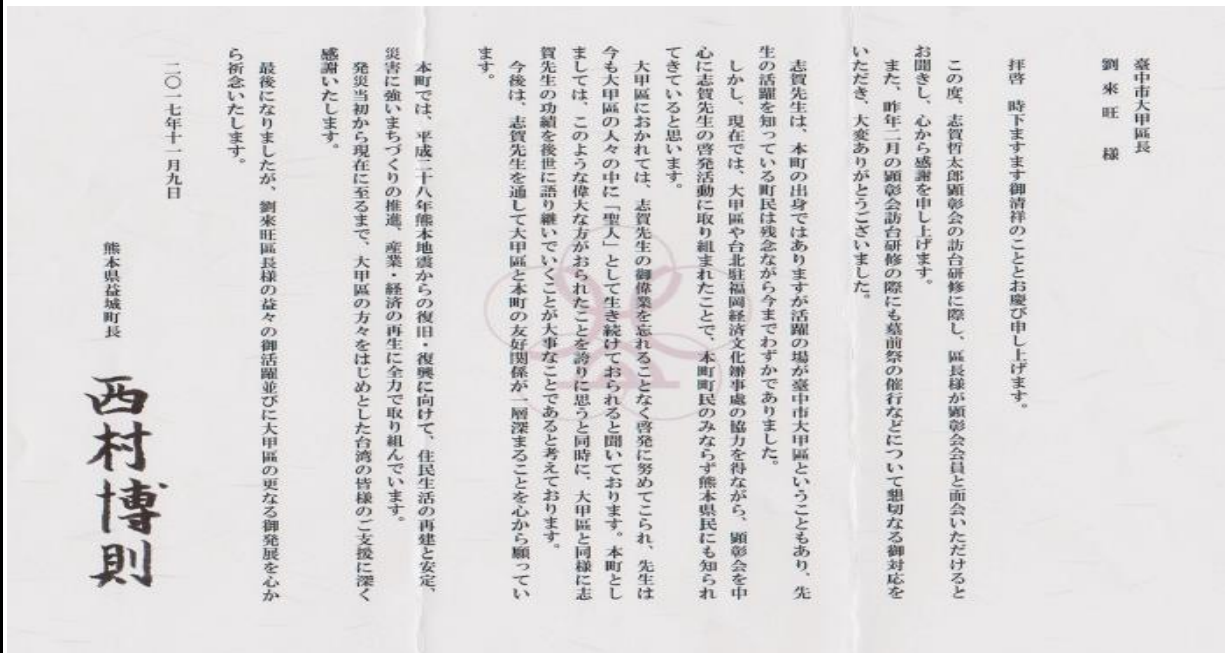
大甲鎮長 林英雄 謹啓

日本國 熊本縣 上益城郡 益城町
町長 川口卯一 殿

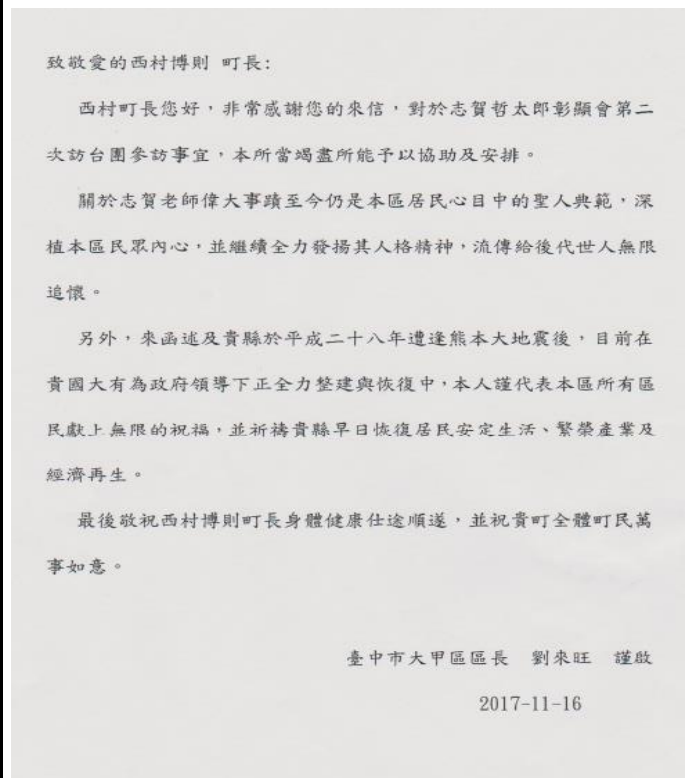
○ 益城町長・大甲区長の親書(平成29年11月)

平成29年11月16日から17日にかけて志賀哲太郎顕彰会が二度目の大甲を訪れた際に益城町長西村博則氏と大甲区長劉來旺氏の間で交された親書である。

● 益城町長から大甲区長宛の親書



● 大甲区長から益城町長宛の親書



(翻訳文)

敬愛する西村博則町長
西村町長、今日は。お手紙に心から感謝いたします。志賀哲太郎顕彰会第二次訪台団の訪問に対し、本公所では、できる限りの協力と配慮をさせていただきます。
志賀先生の偉大な事績は、今もなお本区の住民の心の中で聖人の手本として生きており、本区の住民の心の中に深く根を下ろしております。そして、私達は精一杯(志賀先生の)その人格と精神の啓発発揚を継続し、後世の人々が末永く(先生のことを)忘れないように語り伝えていきたいと思えます。
それから、お手紙で貴県が平成28年に遭遇した熊本地震の後のことについて述べておられました。現在、貴国政府の指導のもとに、鋭意再建が進められておりますことについて、本区の区民を代表してお慶び申し上げますとともに、貴県が早く回復して住民の生活が安定し、産業が繁栄し経済が再生することをお祈りいたします。
最後に、西村博則町長の御優勝と御活躍、並びに貴町の全ての町民の御多幸(皆様万事意のままにお過ごし下さること)を謹んでお祈り申し上げます。

台中市大甲区区长 劉來旺 謹啓
2017年11月16日

(翻訳：河本有紀・折田豊生)

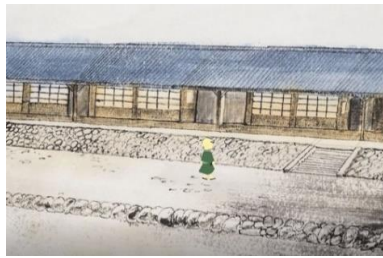
5 動画「大甲の聖人 志賀哲太郎」

● 大甲区公所制作のアニメーションビデオから

		
<p>大甲の聖人「志賀哲太郎」</p>	<p>① 慶応元（1865）年熊本県田原村で出生する</p>	<p>② 父は農機具の鍛冶屋</p>
		
<p>③ 7歳、向学心旺盛で木山の志賀塾で四書五経を学ぶ</p>	<p>④ 17歳、約8キロ離れた神水義塾に通う</p>	<p>⑤ 神水義塾では陽明学、仏学、英文を学ぶ</p>
		
<p>⑥ 21歳、苦学生として明治法律学校に進む</p>	<p>⑦ 24歳、父死亡のため明治法律学校を中退して帰郷する</p>	<p>⑧ 熊本国権党に入り九州日日新聞記者として活躍する</p>
		
<p>⑨ 28歳、政争に嫌気、記者を辞職する</p>	<p>⑩ 原水小学校などで教師となり、日清戦争の情勢を見守る</p>	<p>⑪ 31歳、台湾子弟の日台同化教育の理想をかけた渡台する</p>
		
<p>⑫ 台北市新起町で一杯飲み屋を経営するが経営不振で翌年閉店となる</p>	<p>⑬ 33歳、苗栗県伯公坑で土匪の襲撃を受け、さらにマラリアにかかる</p>	<p>⑭ 大甲の鎮瀾宮内の陸軍病院に運ばれる</p>



⑮ 治癒後、代用教員の面接試験を受ける



⑯ 33歳、家永弁務署長の推薦で大甲公学校の代用教員に採用され、文昌祠西側に住む



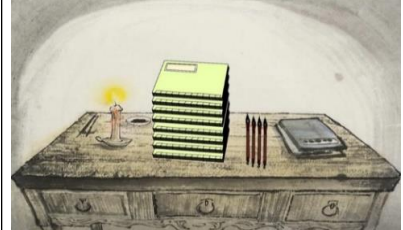
⑰ 修身、国語、算術、体操等の教科を担当する



⑱ 金子校長先生と和気あいあいの教育を行う



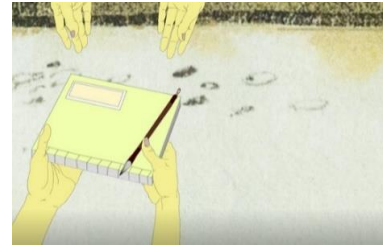
⑲ 住民と警察の諸問題の調停、解決にあたる



⑳ 就学率が悪いので、就学児童の家庭を訪問、学校の勉強を勧める



㉑ 学費が払えない家庭には自らの給料から支援する



㉒ 病気の学生には紙、鉛筆を持参して見舞う



㉓ 怪我した生徒がいればどんなに遠くても背負って送り届ける



㉔ 先生が通ると子供達は先生を囲みおじぎ、先生は一人一人に90度頭を下げて返しし礼儀を教える



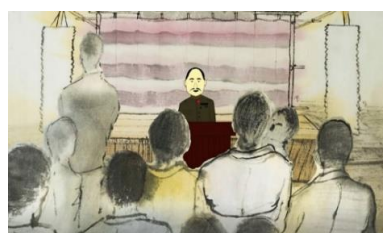
㉕ 座右の銘は「破山賊易、破心賊難」。生徒には「慈悲・節儉・謙虚」の三宝を説く



㉖ 大甲には警察、役場に熊本県人が多く官吏は先生を足蹴にできなかった



㉗ 59歳、生徒の教師殴打事件で、間に入った先生は人員整理に不安を感じ神経衰弱症となる



㉘ 孫文の国民革命運動が大甲に入ると文化啓蒙活動を勧められ台湾人の心理と日本人の身分の間で悩む



㉙ 民族運動、教師殴打事件、教師解雇、漢学抹殺反対等の種々の原因で自決する

6 年表

	年月日	歳	内 容	出来事
渡	慶応元(1865).08.28	0	父甚三郎、母寿加の長男として田原村で生まれる	
	明治4(1871)	6	中村傅兵衛に読み書きの手習いを受ける	
	明治5(1872)	7	木山の志賀喬木の塾に通う	
	明治7(1874).07.06	9		中村傅兵衛死去
	明治9(1876)	11		神風党の変
	明治10(1877)	12		西南戦争
	明治16(1883).03.15	17	中西牛郎塾長の「神水義塾」に入塾	
	明治17(1884)	18		紫溟会は紫溟学会改称
	明治18(1885).04	19	家を継ぐため徴兵免除	
	明治18(1885)	19	新仏教運動の宣伝活動、八淵蟠龍の諸賢人と行動	
台	明治19(1886).04.10	20		小学校令
	明治19(1886).04.30	20	神水義塾修業	
	明治20(1887).02	21	明治法律学校入学、法学を専攻	有斐学校に入る
	明治21(1888).10	23	紫溟新報は九州日日新聞と改称	
	明治22(1889).01	23		国権党創立
	明治22(1889).02.11	23		大日本帝国憲法発布
	明治22(1889).12.25	24	父甚三郎死去(享年57歳)	
	明治23(1890).03	24	明治法律学校中退、帰郷	
	明治23(1890).03.18	24	父の遺産相続	
	明治23(1890).03.18	24	父の遺産相続	
ま	明治23(1890).03	24	紫溟学会入会、九州日日新聞の記者になる	
	明治23(1890).10.07	25		第二次小学校令
	明治23(1890).10.30	25		教育勅語発布
	明治23(1890).11.29	25		国会召集
	明治24(1891).02.02	25	京都オリエンタルホールで英語を学ぶ	
	明治24(1891).12.20	26	京都オリエンタルホール修了	
	明治24(1891).12.25	26		衆議院解散
	明治25(1892).01	26		政府選挙干渉指示
	明治25(1892).02.04	26	古荘嘉門の選挙活動の記事を書く	第2回衆議院議員選挙戦
	明治25(1892).08.12	26	法律学研究のため元控訴院判事深野達に学ぶ	
で	明治26(1893).05.03	27	選挙活動で東京の宗方小太郎を三日間訪問	
	明治26(1893).06.10	27	選挙活動で京都から宗方小太郎へ書簡	
	明治27(1894).03.30	28	深野達の法律学研究修了	
	明治27(1894).03	28	九州日々新聞を辞し国権党を離党	
	明治27(1894).05.11	28	熊本県菊池郡原水尋常小学校雇教員	
	明治28(1895).01	29		国権党台湾植民事業開始
	明治28(1895).03.25	29	原水小学校辞職	
	明治28(1895).03.26	29	大原義塾塾頭に就任	
	明治28(1895).04.17	29		日清講和条約台湾割譲
	明治28(1895).05	29		台湾教育令発布
明治28(1895).05.25	29		台湾民主国宣言	
明治28(1895).06.29	29		日本軍台湾に上陸	
明治28(1895).08.23	29		日本軍大甲を占領	
明治28(1895).09.07	30	熊本市塩屋町(現新町)に台湾拓殖合資会社設立	国権党津田静一	
明治28(1895).10.22	30		台湾民主国崩壊	
明治28(1895).11.18	30		全島平定宣言	

	年月日	歳	内 容	出来事
渡 台 ま で	明治29(1896).01.01	30		芝山嶽事件起きる
	明治29(1896).03	30	大原義塾辞職	
	明治29(1896).04	30	古莊嘉門台湾総督府内務部長	
	明治29(1896).08	31		安達謙蔵国権党党務委員
	明治29(1896).09	31		総督府は国語伝習所開設
	明治29(1896).09	31		台湾拓殖合資会社設立
台 北 か ら 台 中	明治29(1896).12	31	台湾の子弟教育を目指し台湾へ渡る	
	明治29(1896).12	31	台湾語習得を兼ねて台北新起町で酒店業開業	
	同上	31	苗栗国語伝習所大甲分教場設立	
	明治30(1897).08.30	32		土匪討伐熊本部隊出発
	明治30(1897).12	32	資金繰り不足で酒店閉店	新竹県苗栗弁務署管轄
	明治31(1898)	32	台湾縦貫鉄道開通従事、島村ソデを雇う	台中県苗栗弁務署管轄
	明治31(1898)	32	伯公坑で土匪の襲撃を受けるがソデの機転で助かる	
	明治31(1898).08.16	33		公学校令発布(四年制)
	明治31(1898).11頃	33	マラリアで鎮瀾宮(媽祖廟)の陸軍病院に入院	
	明治31(1898).10.01	34	大甲公学校創立	国語伝習所廃止
明治31(1898).11.05	34		匪徒刑罰令発布	
	明治31(1898).12.17	34	公学校教員検定規則発布(教員不足は雇教員で補充)	
	明治32(1899).02	34	家永苗栗弁務署長に教員採用を願い出る	
文 昌 校	明治32(1899).02	34	弁務署雇員として採用され、居所を文昌祠に移す	
	明治32(1899).02.25	34	小学校雇教員陳瑚に従い台湾語研修	4月30日まで
	明治32(1899).05.01	34	雇教員として採用される	
	明治32(1899).05.19	34	大甲公学校で教鞭開始	
	明治33(1900)	35	就学対象の児童宅で教育の必要性を説いて回る	漢文学廃止論争はじまる
	明治34(1901).08.17	35	授業法・国語・心理・唱歌の5週間の講習	苗栗庁苗栗弁務署管轄
	明治35(1902).04	36		家永署長は苗栗庁長に昇任
	明治35(1902).09.18	37	新教室落成(建設委員長呉朝宗=呉淮水の実父)	苗栗庁大甲支庁管轄
	明治36(1903).04	37	三学期制となる	
	明治36(1903).11頃	37	武藤友次郎、男女間の真相確認のため哲太郎宅夜訪問	
	明治37(1904).02.08	38		日露戦争勃発
	明治37(1904).03	38	第1回卒業生を出す	
	明治37(1904).07.14	38	母ジュカ死去(62歳)	
	明治38(1905).04	39	大甲郵便局開業で同局の時計で時刻合わせ始める	大甲城壁撤去
	明治38(1905).07.27	39	戸口調査委員に任命される	
	明治38(1905).09.05	40		日露講和条約
	明治38(1905).09.15	40	苗栗廳第23監督区第7調査区担当	
	明治40(1907).04	41	大甲公学校 四年制から六年制へ	
	明治42(1909).05	43	門下生により勤続10周年祝賀の議、苗栗庁教育長反対	
三 堡 校	明治42(1909).09.18	44	生徒増加に伴い三堡に校舎完成 宿舍移転	
	明治42(1909).	44	大甲街民と日本人衝突、文昌廟小学校閉鎖	
	明治42(1909).11	44		家永庁長新竹庁長へ異動
	明治43(1910).01	44	新年会の席で木藤郵便局長が投げた盃で怪我する	
	明治43(1910).04	44	履歴書の学歴欄に「無し」と記載	台中庁大甲支庁管轄
	明治44(1911).04	45	留学生第一号を出す	
	明治44(1911).09.04	46	文昌祠は台中尋常高等小学校大甲分校となる	
	明治45(1912).05	46	勤続13年厄払い	
	大正2(1913).02.01	47		漢訳文廃止告示

	年月日	歳	内 容	出来事	
三	大正2(1913).04	47	400 餘名男童長辮子全剪完		
	大正2(1913).04.04	47	大甲事件で熊本の宗方小太郎へ書簡を送る		
	大正2(1913)	48	金子校長、監督不行き届きで訴えられる		
	大正3(1914).01.01	48	金子校長に退職金證書交付		
	大正3(1914).03.01	48	金子校長辞職		
	大正3(1914).04	48	新校長に福岡県の岡村正巳が着任		
	大正3(1914).06.17	48	19回始政記念日勤続15年以上表彰受賞		
	大正3(1914).12.20	49		板垣退助台湾同化会組織	
	大正4(1915).01	49		講堂落成	
	大正4(1915).05.30	49	「古莊翁逸事(政界闘士志賀哲太郎)」の記事掲載	九州日日新聞	
	大正4(1915).06	49	米村嘉平が上記記事を大甲公学校に持ち込む		
	大正4(1915).06.17	49	20回始政記念日勤続15年以上表彰で木杯授与		
	大正4(1915).08.10	49	臨時戸口調査委員 台中庁第53監督区第5調査区担当		
	大正5(1916).04.01	50	日本人小学校は大甲尋常小学校となる		
	大正6(1917).01	51	中村文太氏に年賀状を送る		
	大正7(1918).	52	漢学の勉強会閉鎖		
	大正8(1919).08.09	53	台中庁から哲太郎に祝賀会に出席するなどの電話		
	大正8(1919).08.10	53	勤続20周年祝賀会中止	入学資格7歳以上修学6年	
	保	大正8(1919).08.13	53	台湾日日新報が祝賀会中止を掲載	
		大正8(1919).08.17	53	金子元校長が杜香園へ祝賀会中止関係で書簡を送る	
大正8(1919).08.22		53	褒賞受賞		
大正8(1919).10		54	創立20周年運動会		
大正9(1920).04		54		台中州大甲郡管轄	
大正10(1921).01.30		56		台湾議會設置請願書提出	
大正10(1921).10.17		57		台湾文化協会設立	
大正10(1921).10		57	教え子ら大甲漢学会を設立、文化協会が講演を開始		
大正11(1922).02.06		57	高等科新設		
大正11(1922).03.31		57	台湾教育令で漢文が公学校の授業から外れる	教諭名称改め訓導へ改正	
校	大正11(1922).04.01	57	教員心得となる		
	大正11(1922).10	57	海線開通で大甲駅で時刻を合わせる		
	大正12(1923).12.23	58	抗日運動の教え子杜香園ら拘束される		
	大正13(1924)	58		文昌廟で王進財漢学授業	
	大正13(1924).07.07	59		遊泳池完成	
	大正13(1924).12	59	校長から農場管理者への異動命令を受ける		
	大正13(1924).12.21	59	勤続25周年祝賀会		
	大正13(1924).12.29	59	遊泳池で自決		
	大正13(1924).12.31		「信望厚き老教育家池に投身自殺す」の記事	台湾日日新報	
	大正13(1924).12.30		ソデ大甲役場に死亡届を出す 葬儀挙行		
没	大正13(1924).12.31		「信望厚き教育家池に投身自殺す」	台湾日日新報	
	大正14(1925).01.01		呉淮水、校長に清酒を浴びせる		
	大正14(1925).01.08		墓碑建設発起人会議		
	大正14(1925).01.23		津森村役場で哲太郎の名除籍		
	大正14(1925).02.01		芝山巖合祀		
	大正14(1925).02		台湾民報「大甲人士追念故志賀氏」		
	大正14(1925).02		機関紙「臺灣教育」に芝山巖合祀記事掲載		
	大正14(1925).02.15		七七祭墓碑建設会議台幣5000円集まる		
	大正14(1925).02.23		島村ソデ、関係者に告別式の礼状を送る		
	後				

	年月日	歳	内 容	出来事
没	大正14(1925)		島村ソデ、遺品を津森村小谷の妹澤田ミノへ届ける	
	大正14(1925).07		民族運動活動家陳炳が夏季学校の講師をつとめる	
	大正14(1925).12.29		公学校高学年生による命日の基礎清掃・慰霊はじまる	
	大正14(1925).12.30		「大甲聖人故志賀先生を憶ふ」の記事	台湾日日新報
	大正15(1926).01.10		教え子ら大甲日新会を設立,鎮瀾宮で反日講演	
	大正15(1926).06.06			大甲農民組合設立
	大正15(1926).07.31		岡村校長退職	
	大正15(1926).10.30		鐵砧山に「志賀墓園」設立	
	昭和2(1927).02.20		志賀先生の建碑式	
	昭和2(1927).07		教え子ら大甲読書会を設立	
	昭和2(1927).08.15		教え子ら台湾民衆党大甲支部を設立	
	昭和3(1928)11.17		公学校創立30週周年記念	
	昭和4(1929)	57	陳嘉邦、抗日運動で検挙、司法書士免許剥奪	
	昭和5(1930).03.20		島村ソデ死去	
	昭和5(1930).		鐵砧山に江山萬里碑・石敢當建立	
	昭和5(1930).10.27			霧社事件で菅野警部死亡
	昭和7(1932).01.21		哲太郎贈書の大甲街図書館できる	
	昭和8(1933).08		澤田金蔵(ミノの夫)が田原の基地に哲太郎の墓建立	
	昭和9(1934).12.29		十周年墓前祭	
	昭和10(1935).01.01		十周年墓前祭記事	台湾日日新報
	昭和10(1935).08		澤田金蔵(ミノの夫)が田原に墓碑建立	
	昭和10(1935).12.05			北白川宮御遺蹟碑建立
	昭和12(1937)		大甲公学校、現在の國民小學の地に移転	
	昭和13(1938).12.30		金子校長死去	
	昭和14(1939).12.30		金子先生之碑建立	
	昭和15(1940)		志賀先生記念園計画(戦争の為頓挫)	
	昭和16(1941).08		金属回収令で墓碑鉄柵回収	
	昭和20(1945).08.15			日本敗戦
	昭和20(1945).10.17			国民党軍上陸
	昭和21(1946).02.21			日本人、台湾引上げ開始
	昭和22(1947).02.28			2.28事件
	昭和24(1949)			戒嚴令開始
昭和27(1952).08.05			日本大使館開設	
昭和27(1952).08		教え子、日本大使館の哲太郎の墓撤去に反対		
昭和34(1959).10.04		妹ミノ死去		
昭和38(1963)		呉淮水、呉家の墓所を志賀墓園に建設		
昭和41(1966).06.26		「在台執教達廿六載、日人志賀長眠寶島」記事	中央日報	
同上		「反對軍國主義鐵砧山埋義骨」記事	中華日報	
同上		「反軍國主義的日本教育家志賀哲太郎的精神人格」記事	台湾日報	
同上		「義士永世 思想超出国界外激勵台胞抗日軍日籍教師長眠鐵砧山 東日僑記者前往拜墳塋」記事	聯合報	
昭和41(1966).06.27		「日籍哲人親華志士、座香塚万古幽情、呉淮水老先生談、志賀哲太郎」記事	商工報	
昭和41(1966).07.08		朝日新聞「台湾教育の父志賀先生」掲載		
昭和41(1966).07		中村文太の三女とよか「哲太郎の回想メモ」を残す		
昭和41(1966).07.28		「教え子ら生誕百年祭計画、銅像や伝記出版」記事	朝日新聞	

あとがき

本資料集は昭和49年、桑野豊助氏が著した「志賀哲太郎傳」を元に、史実を検証しながら得た資料をまとめたものである。私が志賀哲太郎先生（以下「先生」という。）の名を知ったのは、平成27年11月熊本大学非常勤講師白濱裕氏の紹介による。一代用教員として任官を拒否し、台湾大甲の子弟教育に一生を捧げ今なお聖人とまで呼ばれている先生が、出身地の熊本では無名であり、歴史に埋もれていることからなんとか表舞台へ登場させたいとの思いで志賀哲太郎顕彰会に入会して資料収集にあたった。

入会当時の資料は「志賀哲太郎傳」にある数枚の写真のみであった。舞台の中心は現在の台湾台中市の大甲区であるが、まずは日本における活動を裏付けるものはないかを調べた。しかし、師事した中村傳兵衛の孫中村文太宛の年賀状以外は間接的なものばかりであり、やっと宗方小太郎日記に九州日日新聞記者時代と台湾に渡っての先生の名を発見した。同日記に登場する人物は政界、財界、革命家など当時活躍した歴史上の人たちがほとんどで、その中に名を連ねていることから先生もその一人と確信した。

平成28年2月第一次訪台団の一員として現地を訪れ、資料収集の機会を得た。まず事前の調査で撮影ポイントを定めた計画書をつくって大甲区公所を訪れた。同公所では、劉來旺区長以下多くの職員の方々に出迎えられ、会議室に案内された。訪問団各員の卓上には先生に関する小冊子、リーフレット等が置かれ、またスクリーンにはアニメ動画「大甲の聖人志賀哲太郎」が上映され、同公所によって先生に関する資料がこんなにたくさん制作されていることに驚かされた。

会議室での説明後、同公所の案内で志賀墓園、文昌祠、志賀哲太郎記念室、自決場所等を訪れた。志賀墓園では同公所・訪台団合同の墓前祭を行ったが、同公所では毎年清明節（先祖祭：日本の盆にあたる）に先生の慰霊祭を行っていることを聞き、先生が亡くなって90余年が経ち今なお大甲の人から敬慕されている先生の偉大さを痛感させられた。

帰国後、5月に先生の生誕150年を記念するイベントが予定されていたため、パネル展示用の資料を造るべく、持ち帰った資料の中に引用されていた「大甲鎮誌」、「大甲村庄史」等の文献を調べたところ、先生の肖像をはじめ、当時の貴重な写真を発見することが出来、「志賀哲太郎傳」を裏付ける資料が見つかり始めた。ところが、直前に熊本地震が起こればイベントはやむなく中止となったが、鋭意調査を継続するうちに教え子の写真など貴重な資料が入手できるようになった。

熊本地震で中断した志賀哲太郎顕彰会も平成28年8月から活動が再開し、「志賀哲太郎小傳」の発行、県内各地でのパネル展及び研修会が開催され、この間に御子孫の澤田寛旨氏から遺品や自決時の新聞記事、菊陽町から原水小教師勤務を裏付ける資料、浜松学院大学短期大学部教授弘谷多喜夫氏（元熊本県立大学教授）から金子校長の「嗚呼志賀先生」、教育機関紙「芝山巖合祀」等の資料の提供を受け、また上通町の紀伊進氏（大正13年生・大甲公学校S14卒）からは当時の公学校の様子や先生の友人及び教え子について説明を受けた。

本顕彰会では平成29年4月に資料集を刊行することを決め、同年11月に第二次訪台団調査班・研修班を派遣することにし、同年8月に事前の質問事項約50項目を策定して大甲区公所に協力を依頼した。調査班訪台時、郷土史家の張慶宗先生においてはお忙しい中、回答書を作成、さらに伯公坑など先生ゆかりの場所を案内をしていただいた。また台中市大甲國民小學（大甲公学校はその前身）においては李金發校長先生より貴重な学校史の資料提供を受けた。この訪台の結果、多くの資料を入手することができ、それまでの矛盾点・疑問点も解明することができた。これらの写真や記録が残された背景には先生の教え子の存在がある。その証は先生が亡くなって後の墓碑建設、没後十周年墓前祭の挙行、戦後の墓碑撤去阻止運動、戒嚴令下の生誕百年祭の挙行、墓碑周辺の先生を慕って囲むように建立された多くの教え子の墓など教え子たちの師弟愛の深さ並びに絆の強さを改めて感じさせられた次第である。

本資料集により熊本が生んだ、台湾教育の礎を築いた教育者志賀哲太郎先生の功績・功労と人間像を少しでも知っていただくとともに、日本（熊本）と台湾との交流がますます発展することを祈念してやまない。

最後に本編集にあたって大甲区公所をはじめとする関係機関・団体並びに多くの方々に御協力をいただいたことに衷心より感謝の意を表したいと思う。

平成29年12月29日

増田隆策

協力機関・団体等

台北駐福岡経済文化辦事處、台中市大甲区公所、大甲國民小學、霧峰林家菜園（台中）、撫台街洋樓（台北）、台中州庁、國史館臺灣文献館、国立国会図書館デジタルコレクション、熊本県（地域振興課・熊本県国際課・交通政策課）、熊本県教育委員会、八代市教育委員会、益城町企画財政課、益城町教育委員会、菊陽町、熊本県警察本部、熊本県立図書館、熊本市立図書館、菊陽町図書館、益城町図書館、徳富記念園、四賢婦人記念館、横井小楠記念館、宮崎兄弟資料館、明治大学、熊本日日新聞社、熊本県退職校長会、熊本教育評論の会、日台交流をすすめる会、熊本国際教育をすすめる会、（有）清水木材

協 力 者

戎義俊、李杰弘、李蕙珊、劉來旺、王澤佳、陳榮昌、張玲玲、陳子秦、陳銀子、黃壽華、蕭雅惠、蘇淵池、簡鳳君、莊金龍、黃宏晟、李柏憲、李金發、張國鴻、林永昌、林昌慶、朱江文、吳建東、劉國能、李澄清、洪孟茶、黃華寧、張麗雪、邱細亮、紀伊文吉、許光輝、河本有紀、弘谷多喜夫、紀伊進、中村啓一、紫藤英二、犬童康史、齊藤正孝、坂口幸弘、清水昭義、丸山伸治、永山英樹、田上恵美、福岡康博、梅木節男、中村貞夫、大森勲、杉山幹郎、八木浩光、森川智徳、寿咲亜似(敬称略)

志賀哲太郎顕彰会

<会員>宮本睦士、植山洋一、城本誠也、城本真澄、村口省三、松野陽子、堀田清、齊藤輝代、市川雅浩、守田喬、森本正敏、松野伸子、折田豊生、澤田寛旨、澤田光、樋口利雄、白濱裕、廣瀬勝、増田隆策、内田圭二、外口栄一、外口キヨ子、彌富照皇、藤門豊明、永田誠、野元誠司、壽崎肇、森本展代、井上勝己
<賛助会員>片岡涼一、西たよ子、青木国広、原秀志、宮本光雄、澤田荔子、伊藤トキ、叶貞夫、笠井義雄、松田弘幸、馬場園弓子、天野和也
<協力会員>秋月恵一、折田登和子、亀山一茂、亀山成予、折田安正、折田麻美、白濱靖彦、白濱まゆり、山崎正人、山崎宇代
<顧問>木原稔（財務副大臣・衆議院議員）、稲田忠則（益城町議会議長）、坂田敏昭（益城町教育委員会）、永田壮一（熊本大分ロータリー統轄管理者・東熊本病院理事長）

参考引用文献

志賀哲太郎傳（桑野豊助）、志賀哲太郎小傳（松野陽子）、大甲鎮志（臺中縣妍大甲鎮公所）、大甲村庄史一<志賀哲太郎傳>（台中縣大甲鎮公所）、大甲國民小學史、大甲思想起<大甲老照片專輯二>（台中縣立文化中心出版）、大甲往日情懷<大甲老照片一>（台中縣立文化中心出版）、大甲風豹（台中縣立文化中心出版）、大甲鎮街市發展（台中市大甲区公所）、鐵砧山傳奇導覽解說手冊（台中縣鄉土自然研究學舍）、大甲遇見鄭成功（大甲区公所）、文昌祠之研究（大甲鎮公所）、志賀哲太郎簡介（大甲区公所）、大甲文昌祠（大甲区公所）、台湾への架け橋（蓬萊会）、臺灣總督府職員録（臺灣總督府）、台北写真帖（新高堂書店）、臺灣帽蓆（張仲堅）、赤道と太陽（張建墻）、杜香國文書（中央研究院臺灣史研究所）、熊本時代の中西牛郎（星野靖二）、宮崎滔天全集、合志の南方（佐藤芳男）、原水村郷土誌（佐藤芳男）、熊本国権党系の実業振興策と対外活動（佐々博雄）、宗方小太郎日記（宗方小太郎）、熊本県警察史（熊本県警察本部）、台湾と熊本の戦前・戦後における教育交流の歴史と今後の施策（弘谷多喜夫）、台湾と日本・交流秘話（展転社）、舩船<台湾に死す>（永田日出男）、舩船<志賀哲太郎先生>（坂本達）、明治大学小史（明治大学史資料センター）、有斐学舎開舎記録、写真図解明治天皇、芝山巖学堂（數位典藏與數位學習聯合目錄）、日本蒸気機関車形式図集成（臼井茂信）、九州の鉄道100年記念誌 鉄輪の轟き（九州鉄道百年祭実行委員会・百年史編纂部会編）、日本統治下の台湾・朝鮮植民地教育政策の比較史的研究（弘谷多喜夫・広川淑子）、熊本から台湾への移民について（和田英穂）、台湾全島写真帖（台湾総督府総督官房文書課）、明治期鉄道史資料（野田正徳ほか）、大正期鉄道史資料台湾鉄道史（野田正徳ほか）、歩兵第十三連隊歴史、台湾豊田村のマラリア感染官営移民事業報告書（台湾総督府）、台湾老照片、台湾総督府公分類纂、大甲帽蓆手工編織老片、臺灣總督府學事年報（臺灣總督府學務部）、時代を書きすすむ三菱鉛筆100年（三菱株式会社社史編纂室編）、以日治時期戸口調査簿初探大甲街女性婚姻（李慧婷）、臺灣教育307号<嗚呼志賀先生>（金子政吉）、臺灣教育第272号<芝山巖合祀>、斯文第120号<志賀先生撰文解題並びに訳注>（斯文会会報）、芝山巖の神社化（山本和行）、写真記録日清戦争の時代（日本近代史研究会）、熊本新聞、紫溟新報、九州日日新聞、明治大学小史、移民会社と地方政党（佐々博雄）、台湾鉄道の蒸気機関車について（寺島京一）、保甲海報、壯丁團海報、日本海軍史（海軍歴史保存会）、帝国服制要覧（大阪毎日新聞）、大阪商船株式会社80年史（大阪商船株式会社）日本写真帖（警眼社）、日本統治時代の台湾生活誌（柴公也）、日本統治時代の台湾における修身教科書の同化教育的要素の一考察（申育誠）、日本統治時代の台湾初等教育における同化教育の研究（申育誠）、小川尚義と台湾の日本語教育（蔡茂豊）、匪徒刑罰令與其附属法令之制定経緯（小金丸貴志）、台湾生蕃種族写真帖、台湾日日新報簡介など

熊本が生んだ台湾大甲の聖人
志賀哲太郎

資料集

(非売品)

発行日	平成29(2017)年12月29日
編著	増田隆策
監修	澤田寛旨、白濱裕、折田豊生
特別協力	張慶宗、弘谷多喜夫
発行所	志賀哲太郎顕彰会
事務局	〒861-2242 益城町木山556番地
	植山洋一 ☎ 090-1087-6213
	E-mail: ueyama-1@seagreen.ocn.ne.jp
	折田豊生 ☎ 090(8399)4854
	E-mail: olita@lep.bbiq.jp
